

「熊本支援」プロジェクトの概要

Summary of the Kumamoto Support Project

武蔵野市立第六中学校 田極 政一郎

Masaichiro TAGOKU

公益社団法人全国中学校産業教育教材振興協会会長 岡田 真嘉

Masayoshi OKADA

全日本中学校技術・家庭科研究会会長 池田 敦彦

Atsuhiko IKEDA

1. はじめに

東日本大震災から 5 年、再び日本列島を大きな地震が襲った。現在も不自由な生活をされている熊本県を初めとする多くの皆様に対し謹んでお見舞い申し上げます。

東日本大震災の際に、社団法人全国中学校産業教育教材振興協会と全日本中学校技術・家庭科研究会は連携して、「手回し発電式ライト・ラジオを被災地に届けよう」プロジェクトを行いました。今回の災害に対しても、技術という教科に関わっている者として、ここで学んだ事を生かしたいと考え、震災で苦しんでいる方々を元気づけるための「熊本支援」プロジェクトを実施しました。ここではその概要を紹介させていただきます。

2. プロジェクトの概要

東日本大震災から 5 年目となる平成 28 年 4 月 14 日に震度 7 という大きな揺れが熊本を襲いました。その 28 時間後の 16 日にも同じく震度 7 という地震が発生しました。これは、阪神・淡路大震災と同規模の大地震でした。つい半年前に九州地区技術・家庭科研究大会理事会が熊本城の目の前のホテルで開催され、ライトアップされた美しい姿に感動した者として、崩れた石垣、倒れた建物の映像は大きな衝撃でした。もちろん熊本の方々にはさらに大きなショックを受けられたと思われます。その後も地震が継続している中で、電気は早めに復旧することが予想されましたが、多くの方々が自宅で夜を過ごすことを恐れ、避難所や車の中で過ごされている状況を見たとき、東日本大震災の際

に被災地に送った「手回し発電機式のライト・ラジオ」があれば、また停電したとしても安心であり、ラジオで気分転換にもなるのではないかという声が全日本中学校技術・家庭科研究会関係者から出されました。

2.1 組織的対応

全国中学校産業教育教材振興協会(以下「全産協」)は、技術・家庭科の教材関係の企業の団体であり、所属しているいくつかの企業は、手回し発電機式のライト・ラジオ(以下「発電機式ラジオ」)のキットを販売している。また、全日本中学校技術・家庭科研究会(以下「技家研」)は技術・家庭科教員の全国的な研究組織です。

先のアイディアに基づき、まず技家研の幹部は全産協幹部と相談の上で、熊本県技術・家庭科研究会の田尻安洋会長と連絡をとり、現在の状況を踏まえて、「避難所等で過ごしている方々が発電機式ラジオを必要としているか」、「発電機式ラジオを避難所に送る方法はあるか」を確認しました。その結果「熊本市内は停電が解消されつつあるが南阿蘇地区は被害が大きく、復旧には時間がかかることが予想されることから、発電機式ラジオはありがたい。」、「避難所となっている南阿蘇中学校の職員が熊本市に住んでいることから、発電機式ラジオをまず熊本市立力合中学校に送付いただければ、その職員と連絡をとり避難所に届けるようにする。」との回答を得ました。

これを受け、すぐに全産協は、発電機式ラジオのキットを無償提供していただける企業を。技家研は製作可能な学校の募集に入りました。

企業の方々はこの話しを受け、すぐに対応していただき、5 つの企業から 340 台の発電機式ラジオのキッ

トを提供いただく準備ができました。一方、製作を担当する中学校に関しては、時間の関係から全国に声をかけることが困難であったため、日本産業技術教育学会と相談の上、すぐに対応できる学校を中心にしつつ、九州地区として普段から交流の深い学校及び、東日本大震災の際に全国から支援を受けたお礼をしたいという申し出のあった宮城県の学校に担当していただくこととなりました。

担当していただいた学校は表 1 のとおりです。また、製作に取り組む生徒の様子を図 1 に示します。

2.2 学校における活動

具体的な学校の取組状況に関して、宮城教育大学附属中学校の場合を例に紹介します。

○平成 28 年 4 月 20 日(水)

技術担当教諭に、本プロジェクトの情報が入る。ちょうど生徒会が、今回の震災に対して何かできないかと検討しているさなかであったため、生徒会役員及び管理職等の相談の上、参加したいとの希望を技家研に連絡した。

○平成 28 年 4 月 21 日(木)

技家研では、すでに用意した発電機式ラジオを製作する学校が決定していたが、せっかくの申し出ということで、追加の材料を用意できないか全産協と相談し、なんとか 30 台を用意できることとなる。

すぐに技術担当教諭に連絡するとともに、協力いた

だけの企業に発送を依頼した。

○平成 28 年 4 月 22 日(金)

発電機式ラジオのキットが学校に到着。技術担当教諭は、生徒会役員と共に、できるだけ多くの生徒が協力できるようにするために、どのように作業を進めていくか、今後の予定を検討した。

○平成 28 年 4 月 25 日(月)

附属中学校で今回のプロジェクトに取り組むという情報を受けた宮城教育大学の技術科の学生から協力の申し出があった。生徒の技能の状況を踏まえ、学生には、はんだ付けの指導及び完成品の点検等を担当していただくことになった。

○平成 28 年 4 月 26 日(火)

生徒会役員を中心に、発電機式ラジオの製作を行った。学生だけでなく、附属中学校の先生方も協力してくださった。

○平成 28 年 4 月 27 日(水)

生徒会役員から、全校生徒に今回の取組を紹介し、製作に関われなかった生徒に伝えて応援メッセージを書いてくれるよう呼びかけた。

○平成 28 年 4 月 28 日(木)

動作チェックが終了した機器からメッセージカードを入れて梱包し、発送の準備を進めた。

○平成 28 年 4 月 29 日(金)

完成品を企業に返送した。その後、企業から他校で製作したものをまとめて熊本市立力合中学校に送付した。

表 1 プロジェクト参加校

学校名	参加生徒数	製作台数
府中市立府中第二中学校	20 名	20 台
府中市立府中第四中学校	18 名	20 台
府中市立府中第七中学校	7 名	10 台
武蔵野市立第一中学校	9 名	9 台
武蔵野市立第二中学校	10 名	10 台
武蔵野市立第三中学校	33 名	33 台
武蔵野市立第四中学校	8 名	8 台
武蔵野市立第六中学校	20 名	20 台
中央区立日本橋中学校	15 名	20 台
中野区立第三中学校	34 名	15 台
中野区立第四中学校	25 名	15 台
中野区立第七中学校	7 名	10 台
中野区立北中野中学校	17 名	10 台
鳴門教育大学附属中学校	17 名	26 台
徳島県立城ノ内中学校	12 名	23 台
糸島市立前原中学校	29 名	10 台
武雄市立山内中学校	251 名	50 台
宮城教育大学附属中学校	150 名	30 台

※参加生徒の中には、被災地へのメッセージカードのみの参加者も含む。

3. プロジェクトに対する反応

本プロジェクトは研究を目的としているものではないので、実施後のアンケート調査等は実施していな



図 1 製作に取り組む生徒(徳島県立城ノ内中学校)

い。様々な方々の感想等を紹介することで、この取組の成果を確認することとします。

3.1 指導者の感想

(宮城教育大学附属中学校の指導者から届いたメール)

今回はとてもいい経験をさせていただきありがとうございます。

今回製作は、生徒会の中心メンバーで行いました。生徒たちは非常に積極的に取り組みましたし、たくさん先生の先生方も技術室に足を運んで、一緒に作ってくれました。また、製作に携われなかった生徒に向けて、生徒会からメッセージの協力を呼びかけたところ、200 名を超える生徒が集まり、予定していた人数を大幅に超えカードがなくなってしまうということもありました。メッセージカードの文面を見ても、東日本大震災の際に頂いた御恩を、という内容が多く、被災地だったからこそ取り組めてよかったと感じました(図 2)。

今回声をかけていただきありがとうございました。何より、生徒と一緒に活動できて全校で熊本震災に対する気持ちを確認しあえたことが収穫でした。今後も、何かありましたらお声掛けいただくと幸いです。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございます。

3.2 生徒等の感想

(鳴門教育大学附属中学校技術部員の感想)

熊本での地震から 1 週間ほど過ぎ、僕は、熊本の人のために何かできることはないかと考えていました。そのようなときに、技術部に約 20 個のラジオが届きました。秋の大会に出場するためのロボット製作が後回しになり、少し残念に思う気持ちもあったけれど、

私も、東日本大震災を経験して感じたが、復興には、長い時間と仲間との協力が大事です。今は、大変だと思いますが、少しずつ支え合って頑張ってください。東北からも全力応援しています。少しでも早く復興できるように。
宮城教育大学附属中学校 □□□□□

図 2 生徒が書いたメッセージカード (宮城教育大学附属中学校)

やっと熊本の人たちのためになることができるんだという、うれしさの方が大きかったです。

ラジオ製作が始まると、今していることが全て熊本の人達のためになるんだと思い、少し緊張しました。ラジオ製作自体は、以前、経験したことがありましたが、このラジオを実際に熊本の人達が使うのだと思うと、責任を感じ、1 つ 1 つのラジオに心を込めて作ることができました。どのような方がこのラジオを使っていただけかわかりませんが、一人でも多くの人の役に立って欲しいです。

このラジオが、熊本の人達の 1 日でも早い日常を取り戻す手助けになればと思います。

(宮城教育大学附属中学校生徒会役員の感想)

私たちが作ったものが、誰にどのような形で届くかは分かりませんが、この手回し発電機つきラジオ&ライトが復興のために少しでも役に立ってほしいと願い製作しました。また、それが使う人の心の支えに、希望となったらうれしいと思います。

正直、熊本地震で被災した方々のために、自分に何かできることはないか探していました。しかし、中学生の私にできることは限られていて、支援が逆に被災地を混乱させてしまうということもあることを調べていくうちに知りました。

そこで、このような支援活動に、熊本のために参加させていただけるということは光栄だと感じました。そして、今回の支援活動では被災者の方々が支援物資として、どう使うかがイメージがわきやすかったので、このラジオ&ライトを使う方が少しでも笑顔になってくれることを願いながら製作しました。

(宮城教育大学学生の感想)

今回、中学生が発電機式ラジオを作成するお手伝いをさせていただきました。普段の生活ではんだ付けをしてもものを作るという経験はあまりないと思いますが、今回の取り組みの中で、技術科で学習したことが必要とされる時があるということ、生徒は実感したのではないかと考えています。

また、作成する前に、技術担当の先生からどのような経緯で手回し発電機を作成することになったのかというお話がありました。その後、製作に取り組みましたが、生徒たちは東日本大震災の際に電気がなく不便だったこと、その時の様々な支援へのお返しをするなどの話をしていて、被災した人たちのために作るという意識ができたようでした。

完成した発電機式ラジオを見て、「スマホも充電できる」「ラジオが聞けた」など、しっかりと使えるものを作り上げることができたという満足の言葉が生徒から聞かれましたが、これは、被災した方々に役立つものを作り上げることができたという喜びの言葉でもあったと思います。

このように、今回の取り組みは、生徒にとって「ものづくりの大切さ」そして「だれかのためにつくることの大切さ」を実感できる貴重な機会であったと思います。

そして私自身、東日本大震災のときのお返しができればと思っていましたので、今回のような被災した方々への支援へ関わることができて感謝しております。ありがとうございました。

3.3 報道関係

本プロジェクトに関して様々な報道がされた。主なものは以下のとおりです。

- ・朝日新聞 平成 28 年 4 月 26 日
- ・毎日新聞 平成 28 年 4 月 29 日
- ・西日本新聞 平成 28 年 4 月 29 日
- ・佐賀新聞 平成 28 年 4 月 29 日

4. おわりに

今回生徒の感想等は一部しか紹介できませんでしたが、その他に、佐賀県の中学校では全校生徒だけでなく 50 名以上の保護者の方がメッセージカードを記入したり、徳島県の中学校では卒業生が今回の取組を聞きつけ応援に駆け付けてくれたりと、多くの方々に参加いただくことができました。

数百台というわずかな数ではありますが、今回のプロジェクトにより元気になってくださった方々がいらっしやることがわかり、行ってよかったと考えています。そして、参加した生徒が、技術分野の時間に学び、身に付けたものが人の役に立つことを、そして、どのような想定外の困難に直面したとしても、みんなで考え、行動していくことで解決できるのだということを実感してくれたことが最も大きな成果ではないかと考えています。

最後になりますが、本プロジェクトに協力いただいた、キットを提供いただきました企業の皆様、日本産業技術教育学会の皆様、そして製作に取り組んでいただきました学校の皆様、ご協力いただきました関係者の皆様にお礼申し上げます。



図 3 新聞記事の例 (朝日新聞東京版平成 28 年 4 月 26 日) (転載許可あり)